

「内視鏡的大腸病学」

群馬県立がんセンター 長廻 紘 著

日本消化器病学会名誉会長・アジア太平洋消化器病学会理事長

竹 本 忠 良

群馬県立がんセンターの病院長の長廻 紘博士は、東京女子医科大学の客員教授を兼ねていて、わが国の大腸内視鏡学の最高級の指導者として縦横無尽の活躍をしている。いまさら、ここで著者のプロフィールを紹介する必要はないだろう。私の書棚にも、何冊も彼の著作が並んでいて、私と共編の内視鏡の本も数冊ある。

いつも悠々と迫らない大陸的な大人の態度なので、去就が定まらないことしばしばの都会人からは、ときに不遜な態度だと、とんだ誤解を与えることがあるが、少しつき合くと、根は実にやさしいデリケートな男だ。暇さえあれば、実に幅広くいろんな本を読んでいるので敬服している。彼の同級には、筑波大学の板井悠二教授や東京女子医科大学の大井至教授らがいるが、長廻・大井の2人が、東京女子医科大学消化器内科に医療練士生としてきたのは、東大紛争で入局問題がこじれにこじれたおかげであったと言えよう。

長廻 紘君が内視鏡の道に入った

のは、ちょうど国産のファイバースコープが開発中の時代で、消化器病センターにも大腸専用のスコープがまだないころであった。はじめ上部消化管の内視鏡を学ぶとともに、早くから大腸に興味をしばって、独特の挿入法を考案したりして、早くから頭角を現していた。そして、症例の多かった消化器病センターの大腸の内視鏡検査を引き受けた。当初の内視鏡カラー写真など、手札判に引き伸ばすことがやっとなであったが、いまの電子スコープなら四ッ切判は平気だろう。

この「内視鏡的大腸病学」は、「あとがき」にも書いているように、彼の労作の「Colonoscopic Interpretation」(Kou Nagasako, IGAKU-SHOIN, 1998)が基礎となっていてできあがった本であって、日本語の本がまずできあがって、のちに英文著書となることと、まさに逆である。むしろ日本語訳に心血を注いだことは、彼が述べている。

英文の著書でも、X線写真が1枚も入っていない、初めての本格的

な内視鏡の本が日本で出版されたと、同君らが編集した「Atlas of Gastroenterologic Endoscopy by High-Resolution Video-Endoscope」(Kou Nagasako, Takahiro Fujimori, Yoshio Hoshihara, Masafumi Tabuchi, IGAKU-SHOIN, 1998)とともに、ウィーンの世界消化器病学会議と世界消化器内視鏡学会議に集まった人を驚嘆させた。それだけに、高画素数 CCD を駆使した内視鏡写真はまさに圧巻と言えるだろうし、内容の著述ぶりは、序文でもわかるように平易、親切で、この種の本の模範であると高く評価できる。文献も実によく読んでいる。この著者に、大腸内視鏡の歴史、挿入法、内視鏡治療を含めた、更に完成度の高い「内視鏡的大腸病学」の著述を、早々に望むものは私だけではないだろう。

● B5 頁 304 図 24 写真 3
カラー写真 493 表 57 1999 定価
(本体 20,000 円 + 税) 円 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)